

## 3章-3

# 文化的多様性のためのアジア・メディア環境 の再構築

——「d'CATCH プロジェクト」

ペク・ソンス（神田外語大学外国語学部専任講師）

坂田邦子（東北大学大学院情報科学研究科講師）

## 1. d'CATCH プロジェクトとは

### 1-1. プロジェクトの背景

「アジアの世紀」とも言われる 21 世紀に入り、政治経済のあらゆる領域において「アジア」という共同体としての意識が高まる一方で、多様な伝統文化や価値観の共存に対する欲求は依然として強くある。その背後には、アジアにおける通信・放送衛星によるメディアのグローバル化やデジタル化、事実上国境を消滅させたインターネットによる情報の制限なき往来などによるアジア的な文化・価値観の存続に対する危機感とポストモダン的な混淆としたメディア環境に対する言いようのない不安がある。とりわけグローバル化した映像メディアにおける欧米とアジアの不均衡な関係については多くの議論がなされてきたが、一方で、日本と他のアジア諸国との歴史社会的な問題群と映像メディアの関係に目が向けられることはほとんどなかった。特に、常に「アジア」を他者として表象してきた日本の映像メディアは、日本とアジア諸国の歪んだ関係に少なからず影響され、そして影響を与えてきたと言える。しかしながら、このような異文化表象、他者表象の問題を乗り越えて、文化的多様性のあるメディア環境を再構築しようという試みは、歴史を越えて日本と他のアジア諸国との新たな関係性を築くことと深い関係があると思われる。

### 1-2. プロジェクトのねらい

本研究は、このような問題を残したまま多様化しつつあるアジアのメディア環境を社会文化的な側面から再構築していくための可能性と問題点について、学術的かつ実践的

な視点から検討することを目的とする。このためのキーワードとなるのが、最近、日本だけでなくアジアにおいても注目されているメディア・リテラシーという概念である。メディア・リテラシーとは一般に「メディアを批判的に読み解く能力」だとされるが、上述したように、ある種の支配的な意図によって歪曲され偏向した異文化表象・他者表象に対峙するときに殊更に必要とされる能力であるとも言える。またメディア・リテラシーとは、メディアを使って情報を発信する能力でもある。本研究では、メディア・リテラシーという概念が持つこのような二つの要素、1) 異文化表象・他者表象に対するクリティカルな視点、2) 異文化表象・他者表象ではなく、自ら自文化を表象し、主体的に発信するという視点を持ちながら、異文化間における共同映像制作という形態の中で、実際に文化的差異や異なる価値観をぶつからせながら映像表現を行うことで、多文化的なメディア環境におけるメディア・リテラシーの問題とともに、映像メディアによる多様な文化や価値観の表現についての本質的な問題点を明らかにすることを目的とする。

### 1-3. プロジェクトの概要

上述したとおり、本研究は実践的な研究プロジェクトであることから、映像制作という実践そのものを研究対象とし、この実践自体をデザインし、観察・評価の対象とするという実践的な研究手法をとっている。

具体的な実践の内容として、2003年度にフィリピンと日本の大学生による映像の共同制作とともに、これと連動した二回のワークショップを行った。2004年度にはさらにタイの大学生が加わり、少し形態を変え、三カ国間で個別に映像制作をしたものを持ち寄って上映および討論をするワークショップを開催した。各年度の詳細は以下の通りである。

#### ■2003年度活動（2003年10月-2004年1月）

##### [参加者]

##### ・フィリピン

サントトマス大学、エデュケーションテクノロジーセンター

アルベルト・ロリート、ロウェナ・カントゥーバ、マリー・クリスティ、フェイ・マーテル・アブガン、

トマシアン・ケーブルテレビ学生 31名

##### ・日本

神田外語大学

ペクソンス、石井雅章、メディア・コミュニケーション論履修学生 18名

東京大学大学院情報学環メルプロジェクト

坂田邦子、中村豊、村井明日香、木田貴裕、ホセ・ルイス・ラクソン

## [活動内容]

## ・映像制作

身近で日常的なことからフィリピンと日本の関係について考えることを目的とし、「食文化」をテーマに、サントトマス大学、神田外語大学の学生がそれぞれ3つのグループに分かれて各5分のビデオクリップを制作した。1月末にフィリピンの学生が1週間来日し、各グループがペアになって、共同でフィリピン・日本の2つのビデオクリップを組み合わせ、最終的に15分の番組を3作品完成させた。3作品のテーマは以下の通り。

グループA：Puerta de Cultura) 「フィリピンの日本料理と日本のフィリピン・レストラン」

グループB：Astig Kumi) 「アドボ巻きずし」—フィリピン・日本、食と文化の融合

グループC：Champoyaki) フィリピン、日本の変わった食べ物

## ・オンライン・コミュニケーション

映像制作を行う一方で、ブラックボード・システムというeラーニングのシステムを利用して、インターネットを通じたディスカッションを行った。グループごとのディスカッションを行いながら、テーマについて相談したり、互いの文化について質問しあったりしながら、日本人にもフィリピン人にも楽しんで見てもらえるテーマや表現について考えた。

## ・ワークショップ

実践の始まりと終わりにワークショップを行った。第一回目は、10月中旬にメディア開発教育センターにて行ったインターネットによるオンライン・ワークショップで、自己紹介と映像制作のトピックの紹介を通じてパートナーと知り合うことを目的とした。第二回目は、1月末、日本での一週間の共同制作の後、制作した映像の上映会を行い、完成した作品について、またはこれらを通じて、映像におけるステレオタイプの問題や、それぞれの国の映像文化の歴史的な背景などについての活発なディスカッションを行った。

## ■2004年度活動（2004年4月–2005年2月）

## [参加者]

## ・フィリピン

サントトマス大学、エデュケーションテクノロジーセンター

アルベルト・ロリート、ロウェナ・カントゥーバ、フェイ・マーテル・アブガン

デパートメント・オブ・メディア・スタディーズ学生名16名

## ・日本

神田外語大学

ペクソンス、石井雅章、須賀大吾、コミュニケーション演習履修学生9名

東京大学大学院情報学環メルプロジェクト

坂田邦子、中村豊、木田貴裕

・タイ

タイ・ユース・ニュース・センター・アソシエーション

ウィラ・スワナチャット、学生数名

チュラロンコーン大学

オラーン・ウォンバンドウ、メサ・スリタナウォン、学生数名

[活動内容]

・映像制作

この年度は、共同制作を行わないことを前提に、3カ国が個別に映像制作を行った。ただし、「私たちの国の『アジア』を探そう！（Discover “Asia” in our country!）」という共通のテーマを設定した。この枠組みの中で各大学、各グループが個別にトピックを選び、15分のドキュメンタリー形式の映像を制作した。

・ワークショップ

2月初旬、サントトマス大学にて3カ国で制作された映像を持ち寄り上映会を行い、制作した映像について、また「アジア」とは何かということについてのディスカッションを行った。映像制作を通じて「アジア」というテーマに取り組んだものの、結局それが何であるのかとらえどころがないといったことを素直に映像に表現しているチームもあれば、欧米の文化やアジアの伝統文化の融合そのもの、多様な文化こそが「アジア」なんだという提案を行ったチームもあった。また、自分たち自身の生活の中にアジアの他の国々との関わりを見出していくような作品もあった。ディスカッションでは、「アジアは多様で一枚岩ではない」とか「アジアは1つなんだけど、私たちはみんな見ているところが違うんだ」というような様々な意見が出された。各国の作品のテーマは以下の通り。

フィリピン1) “Halo Halo”フィリピン多様な文化と「アジア」

フィリピン2) “Dyip Rocks”フィリピンの文化である「ジブニー（乗り合いタクシー）」について

フィリピン3) “Every Grain of Rice”アジア文化の象徴としての米についてのレポート

フィリピン4) “Martial Arts”フィリピンの格闘技「アーニス」について

日本1) “No Asia No Japan”食材の輸入が禁止されたらどうなるか

日本2) “Why Asia?”高校生の国際交流を通じて「アジア」を考える

日本3) “Rice”輸入米について

タイ1) “TSUNAMI”スマトラ沖地震の被災地の現実を捉えたドキュメンタリー

タイ2) “The Tattoo” タイの仏教文化とタトゥー

## 2. 神田外語大学実践の概要とねらい

d' CATCH の日本側における研究実践は神田外語大学で行なわれた。1 回目は 2003 年 9 月～2004 年 1 月に「メディア・コミュニケーション論」の授業を利用し、2 回目は 2004 年 3 月～2005 年 2 月に「コミュニケーション演習」の授業で実施された。d' CATCH プロジェクトを授業のプログラムとして実施する際の概要およびねらいは図 1 の通りである。

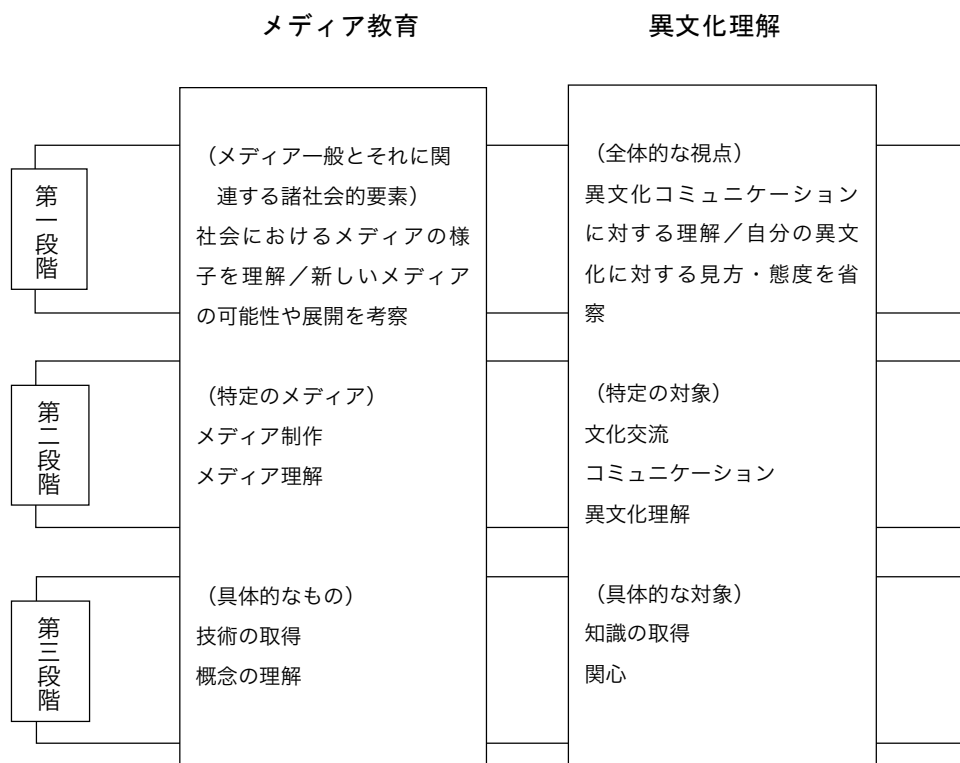


図1 実践授業における概要・ねらい

この実践授業は「メディア教育」と「異文化理解」という二つの教育内容を縦に三段階の教育目標を組み合わせた構造になっている。「メディア教育」において第一段階の目標は「映像制作に必要な技術の獲得」「メディアをするための概念の理解」におき、第二目標を「映像の制作」「映像メディアの理解」、第三目標は「社会における映像メディアの様子を理解」「新しい映像メディアの可能性や展望を考察」にした。一方「異文化理解」という側面においては、それぞれ「相手の国・地域に関心を持たせ、基本的

な知識を獲得する」「実際のコミュニケーションや文化交流を行なう」「異文化コミュニケーションへの理解と自分の異文化に対する見方・態度を省察する」ということを目標として定めた。このような内容は学生たちを一通りの「制作」や「交流」をしたことで満足・終了させるのではなく、基本的な技術や知識を身につけさせ、自分たちの実践活動の意味を自覚させ、「より多様で持続的なメディア活動・異文化交流」につなげられる動機になれるようにデザインされたものである。

### 3. 神田外語大学実践

#### ■2003 年度の実践内容

神田外語大学の「メディア・コミュニケーション論」の授業を利用し、2003 年 9 月～2004 年 1 月まで行なわれた。講師は 7 名、学生は全学科・全学年で 18 名が参加した。映像制作は 3 つのグループで実施されたが、テーマは「食文化」であった。それぞれのグループの作品は以下である。

グループ1) 日本のフィリピンレストラン

グループ2) フィリピン料理「アドボ」を作る

グループ3) フィリピン人にとっての日本の変わった食べ物「お好み焼き」の紹介

この実践は 2004 年 1 月に神田外語大学のメディア教育センターで実施されたフィリピンのサントトマス大学グループとの共同ワークショップと 2004 年 3 月東京大学大学院情報学環メルプロジェクトのシンポジウムでの成果発表をもって終了した。

#### ■2004 年度の実践内容

神田外語大学の「コミュニケーション演習」の授業を利用し、2004 年 3 月～2005 年 2 月までで行なわれた。講師は 5 名、学生は全学科の 3・4 年生 9 名が参加した。二回目の実践は一回目の実践の成果と課題を取り入れる形でデザインされた。映像制作は 3 つのグループで行い、テーマは「われわれにとって『アジア』とは？」であった。各グループの作品は以下である。

グループ1) 食材の輸入が禁止されたらどうなるか

グループ2) 高校生の国際交流を通じて「アジア」を考える

グループ3) 輸入米について

この実践は、2005 年 2 月にフィリピンのサントトマス大学で実施された 3 カ国（日本・フィリピン・タイ）シンポジウムをもって終了した。



写真1 チームで撮影に臨む学生たち

#### 4. 結論と展望

d' CATCH プロジェクトは二つの次元で構成されている。まずは日本、フィリピン、タイなどそれぞれの国で行なわれる研究実践である。もう一つは各国のチームが制作した作品を持ち寄って、国際的な広がりにおいてそれぞれの作品や相手の存在意味を問い直し、活動の意義を確認・活性化する次元である。この活動は二つの次元において断絶的に行なわれるものではなく、相互補完的で連帯的なものである。

神田外語大学で二回にわたって行なわれた実践は「映像制作を通してのメディア教育」と「異文化理解」を両立させたもので、学生たちは自分の関心を「異文化：アジア」に向けながらその思いを映像作品としてまとめ上げていく作業をした。学生たちにとっては、映像制作に必要な技術を覚えたりメディア概念を取得していく過程であっただけでなく、「アジア」という他者が日本社会または自分の中にどのように表象されているかを認識し、その他者との関係を見つめなおすことによって、自分や日本社会の現在を理解し、その歴史性を乗り越える形で新しい関係を築いていく事への可能性を試すことでもあった。

2004年1月に神田外語大学で開かれた「日本・フィリピン映像共同制作ワークショップ」と2005年2月にフィリピンのサントトマス大学で開催された「日本・タイ・フィリピン共同スクリーンワークショップ」では、それぞれの国で映像作品を作る過程で発見されたお互いの関係性や「アジア」に対する自己認識と問題意識が持ち込まれ、検討された。そこでは各国が持つ特殊で固有な文化的・メディア的状况が話され、またグローバル化がもたらしたこの地域共通の現況が議論された。その中で文化的多様性のあるメディア環境を再構築しようという試みとしてのこのプロジェクトの意義と可能性が

確認された。

上述したようにこのプロジェクトは一年目、二年目とその内容を変えてきた。それは実践で発見された成果と課題を次の実践に反映してきた結果であった。そしてこれからの課題と展望はこのプロジェクトで得られた研究の枠組や結果を具体的な状況にあわせプログラムし直しながら、地域的・人的ネットワークを広げていくことによってより多くの文化的多様性を確保し、その多様性が人々の環境として機能するようにしていくための方法を探っていくことであると思われる。